

NY 研修 報告書

研修医 2 年 加畑 映理子

憧れの NY の地で研修ができると聞いたのは、医学部 6 年の時です。その時点で NY 研修への参加を胸に誓い、研修医 2 年になった今、遂に行ってくる事ができました。2 週間の滞在は振り返ってみるとあっという間でした。問診・身体診察の仕方、日本とアメリカでの診療の違い、最先端の研究などを学び、NY の雰囲気に触れ、様々な出会いを経験し、少し New Yorker に近づいた気分です。

8 月 15 日に日本を発ち、同日アメリカの NY に着きました。私にとっては 2 度目の NY。1 度目との違いは“研修”であるということで、不安もありましたが期待の方が大きかったです。

初めの 3 日間は Pace 大学の Janis 先生から医療面接の仕方を学びました。日本語での医療面接は経験がありますが、英語になると難易度が遥かに高くなるように感じます。自己紹介の仕方、問診の内容、要約の仕方などを教わりました。

次の 3 日間はシュミレーションセンターで模擬患者に問診と身体診察を行いました。Pace 大学で問診の練習はしていましたが、実際に患者を相手にすると緊張が増します。患者役の方たちは本職が役者であり、本当の患者のように症状を演じます。2 日間で計 10 人の患者、つまり 10 症例の問診をとりました。残りの 1 日で 5 症例の身体診察です。制限時間内に聞きたい情報を聞き、聞いた情報を要約して患者に確認をします。患者と話している時には相手に質問の意図が伝わっているかが 1 番心配でした。相手の表情の変化を常に気にしていました。各症例が終わる度に患者役の方からのフィードバックがあります。そこで私がよく受けたアドバイスは、声をもっと大きくすることでした。自信の無さが声に現れていました。日本での診療の際には威圧的にならないよう、優しい口調でゆっくりと話していたことも声が小さくなる要因の 1 つではあったと思います。けれども、意識して大きな声を出しているつもりでもやはり声は小さくなってしまい、小さくなることで聞き取りにくくなり相手に伝わらず、更に自信をなくすという悪循環に陥ってしまいました。日本においても、声が小さいことと口調が優しいことは違います。実際の診療で患者からフィードバックを受けることはないので、今回いただいたアドバイスはこれからの診療に活かしたいと思います。

シュミレーションセンターでの実習後は病院見学でした。私は、内科医師の木村啓子先生、眼科医師の遊馬吉右衛門先生のもとに伺い、診察を拝見しました。そこではアメリカと日本の診療の違いを知ることができました。1 番印象に残っている違いは、診察室で待っているのは患者であり、患者の待つ診察室へ医師が移動して診察を行うという点です。日本では診察室で待っているのは医者です。どちらが良い、悪いということはありませんが、患者が診

察室に入ってくるころから診察は始まっていると学んできたため、医者が移動する光景は驚きでした。しかしながら、アメリカでは分業が完璧になされており、診察がスムーズな印象を受けました。患者が診察室に来るまでに、看護師が予診をとり、必要であれば検査も行い、医師が診察室を訪れる頃には患者はベッドに寝ており、すぐに診察を始められる状態でした。日本の病院は待ち時間が長いと聞きますが、このような違いから待ち時間の短縮につながっているのではないかと感じました。

他にも、英語の表現は勉強になりました。私は身体診察をする際、患者にお願いするときに「Please ~」や「Could you ~?」という表現しか使ってきませんでしたが、先生は「~ for me?」という表現をよく使っていました。例えば、上を向いてほしい時に、「look up」だけでは命令口調ですが、そこに for me を付けて、「look up for me?」と言うだけでとてもやわらかな印象を受けます。医師は患者に丁寧にかつ的確に支持しなければなりません。話し方、表現の仕方は些細な会話からでもとても勉強になりました。

最後に、2ヶ所の研究室見学を行いました。

森下先生は脳の可塑性について研究されている方で、自身の研究室を持っていらっしゃいます。研究内容やアメリカで研究室を持つことについてお話していただきました。星野先生は癌についての研究です。がん細胞に由来するエクソソームの役割などについて研究していらっしゃいます。星野先生のいらっしゃる研究室では他にも日本人の医師が研究しており、それぞれの経験を拝聴しました。アメリカに来るまでの経緯は各々違い、私もいずれ機会を持つのではないかと期待が膨らみました。今回の研究室見学で、今まではそれほど興味なかった研究にとっても興味を持ちました。将来、必ず臨床研究を行いたい、そのためにも臨床現場で些細な疑問などを大切にしようと思います。

最後に、引率して下さった Andrew Schneider 教授、現地でお世話になった全ての方々に厚く御礼申し上げます。この研修を通して、私の海外留学への憧れはより強くなりました。医学英語の勉強は後回しにしてしまいがちですが、これからも精進し今回の経験を将来に必ずつなげていきます。



at Pace University



with Dr. Kimura



at Morishita Labo